（第３種郵便物認可）　日本教育新聞

子ども、保育者、保護者も「わくわく」

めぐみこども園（福井市）の実践から〈上〉

「共主体」の保育を心掛け

「つながる・深まる・広がる」遊びに

「やってみたい」を実現

生活リズムや思い尊重

「芽が出る　こども園」を方針として、「ひとりひとりの個性を尊重する保育」「こどもの育ちと学びを支える主体的な遊びを大切にする保育」に取り組んでいる福井市の（社福）めぐみこども園（中戸華恵園長、園児182人）。「共主体」を心掛け、子どももわくわく、保育者もわくわく、保護者もわくわく、地域もわくわくする保育を実践している。2回にわたり、具体的な実践とその実現までに取り組んだ変革の内容を紹介する。

めぐみこども園では、子どもも保育者も共に認め合い、尊重し合える仲間づくりを大切にした「共主体」の保育を心掛けている。子どもたちの声から始まる「つながる・深まる・広がる」遊びの連続した保育を大事にしており、その思いや声を保育に反映、対話や振り返りを通して試行錯誤しながら探究が行われるプロセスを重視している。

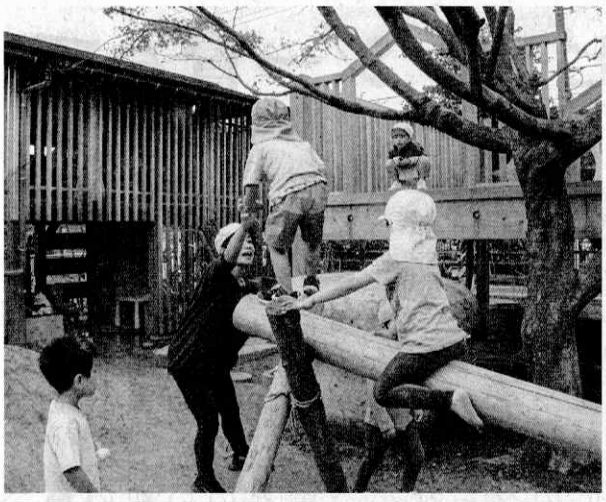
また、在園児保護者や地域の人たち、学生・生徒、未就園児保護者ら「人と人との『縁づくり』と共に遊びを楽しむ『宴づくり』」にも力を入れている。

学生や保育に興味・関心がある人たちへは「めぐみサポーター」として子どもの遊びを見守ったり、日頃から絵本読み聞かせや行事に参加し、サポートすることなどを通して子どもたちと関わることで、保育の楽しさや子どもの面白さ、保育教諭のやりがいを実感してもらっている。

子どもたちと卒園児、保護者、地域の人たちには、つながりを大事にしている。

未就園児保護者には、未就園児対象のひろばを充実させ、妊産婦対象の内容や父親ひろば、看護師・保健師も入った保育相談などを行い、「安心して遊べる場所が欲しい」「子育ての情報をもっと知りたい」などさまざまな声に耳を傾けるとともに、保育の楽しさを共有してもらえるようにしている。

こうしたことを通して、子どもも、保育者も、保護者も、地域もわくわくする保育を実践している。



豊かな環境の園庭。その一角では、子どもたちがキノコ型の台に跳び移る遊びに挑戦している

保育を振り返るサークルタイムの様子。保育者が撮影した写真を画面に映しながら遊びを共有する

日々の保育は、子どもたちの思いや声が反映されている。室内のコーナー遊びと屋外での園庭遊びを子どもたちが自己選択して主体的に遊べる環境を整えており、内容も多種多様で子どもの「やってみたい」が実現できるようにしている。子どもたち一人一人の生活リズムや思いを尊重して生活できるようにするために「流れる保育」も実践している。

自由に遊ぶ時間、子どもたちは「挑戦してみたい」「調べてみたい」遊びに取り組み、その中で一人一人が葛藤したり、試行錯誤したりながら探究していく。保育者も分散して配置し、振り返りのときに遊びの様子や子どもたちの育ち・学びを共有できるようにしている。

11月1日の保育でも、こうした姿が園内のさまざまな場所で見られた。園庭では、アトリエで木の枝を使いながら紅葉した木を描く子どもたち、築山に登りトンネルを掘る子どもたち、ツリーハウスの中で過ごす子どもたち、地域のお散歩マップ作製でパン屋さんや駅の恐竜を見に行く2歳児たちなど、思い思いに好きな遊びを楽しんでいる。

夏から大切に世話をして、育つのを楽しみにしていたミカン。実が色づいたことを確認した子どもたちは、収穫して食べることにした。食べ終わった後には「おいしいから食べてみて」と先生や友達に手渡し、おいしさを共有した。身近な園庭に実る果実でジュースやジャムを作るなど、子どもたちの探究心が見られる。

別の子どもたちは、巨大なキノコ型の台に手前の丸太橋から跳び移ることを思い付き、挑戦を始めた。最初は跳べない子も諦めず、憩いの場、子育て支援の場として安心できる居場所づくりを目指した「めぐみVILLAGE」を実施し、毎週土・日曜日と祝日も園庭を開放して地域のコミュニティーの拠点となるよう共有してもらえるようにしている。

こうしたことを通して、子どもも、保育者も、保護者も、地域もわくわくする保育を実践している。

2面に関連記事

論点解説　小1に「仮学級」

近い木に登ってから跳び移るなど工夫する様子があった。

あるクラスの保育室では自然物を凍らせたり、焼いて食べたりするブームが続いたことから、保育者が「自然物を使ったゲームができたら面白いな」と考え、ドングリ転がしができるように道具を準備し、壁に牛乳パック1枚だけを貼り付けておいた。それに気付いた子どもたちは、そこでドングリを転がして容器の中に入れる遊びを始める。その後、転がる距離を長くするために試行錯誤し、より遊びが楽しくなるように工夫を重ねた。

保育者の主体的な姿もあり、一緒に遊んだり、子どもの声や姿を基に環境を再構成したりするとともに、写真で遊びの様子を記録していく。昼食の後にはサークルタイムで子どもたちと共に遊びを振り返って共有し、翌日以降の遊びにつなげている。

続　保育の

秋田　喜代美
学習院大学教授

先
基本
点か
議論
に「
たが
てい
から
員の

セ
担当
広場
とも
は
難所
向け
キッ
でき
等の